

■ 2017年度フライブルク大学主催夏大学参加者を引率して



フライブルク大学が主催する外国人のための語学講座「夏大学」が2017年8月3日から25日（授業期間）までの約1ヶ月にわたり開催された。今回で18回目となる派遣には多くの応募者があり、一定の条件を満たした最終10名の本学学生が参加した。今回も前期試験の都合により1日遅れの4日からの授業参加となった。今回は従来のフライブルク大学医学部付属病院の院内薬局の見学に加え、薬学部の研究施設見学、そして市内の個人薬局の見学が実現した。夏大学のドイツ語学習にプラスして薬学発祥地のドイツにおける薬学教育、薬局の運営に関する学習の機会が得られるなど、専門分野についても大変充実した夏大学となった。いずれの見学会も薬学を志す異国の若い学徒の将来を期待する関係者の一方ならぬご厚意により実現したものである。

夏大学では午前中のドイツ語学習以外に、午後にはドイツの環境問題、政治経済、文化などを講ずる講義がオプションとして用意されている。また午前中に学習したドイツ語を大学外で実際に応用するための様々なプログラムが提供されている。これは世界各地から集まったクラスメートやコース参加者との交流を図る絶好の機会でもある。また週末にはドイツおよび周辺国の歴史や文化に触れるバス旅行が計画されているなど、短い期間に徹底してフライブルクを体験できる仕掛けが用意されている。

今回の夏大学に参加した3名の代表者にフライブルクでの異文化体験を寄稿してもらった。ドイツという英語を公用語としない国で1ヶ月もの間、慣れない生活習慣、全て理解できるとは言い難い言葉を話す世界

に身を置いた参加者の率直な体験談を読んでいたきたい。この体験談を読んで自分も是非今まで味わったことがない強烈なカルチャーショックを体験してみたいと思ったら、育心館4Fにある桑形研究室を訪ねてほしい。夏大学やフライブルク大学に関する情報を提供したい。フライブルク大学の夏大学は3年前から大学の奨学金が支給される海外研修となり、一定の条件を満たした受講希望者には海外語学研修の単位が認定され、大学より参加費用の一部が補助されることになっている。学生時代に長期の海外生活を体験したい、見知らぬ異国の地で自分の力を試したいと考えている諸君には是非ともこの制度を利用していただきたい。

最後になりましたが、この短期留学を実施するに当たり、物心両面でご支援いただきました理事長先生、学長先生をはじめ多くの本学関係者の皆様に感謝申し上げます。

ドイツ語担当准教授
日本フライブルク・アルムニ会会員
ひろし
桑形 広司



フライブルク大学薬学部研究棟入り口にて
ドイツ人教授陣+ジュニアとともに

よしこ
■ 学生実習支援センター 千原 佳子

8/3～27の間、フライブルク大学における「夏大学」に学生引率兼留学者として出張させていただきました。

今年は職員も学生と同様に寮に入り、留学生として英語コースのプログラムに参加できるとのことで、日頃から英語力の強化を目指している筆者にとっては絶好の機会となりました。事前のWebテストにてクラス分けがなされ、大学卒業以来の90分×2コマ/日を真剣に受講しました。授業スタイルも日本とは大きく異なっており、かなりハイレベルな授業内容でした。クラスメイトは多国籍で、イランからの留学生が多かったことには驚きでした。寮のフラットメイトも夜遅くまで英語でなにやら議論していることもしばしば。自身の英語スピーキング力のなさを痛感しつつも、日本国内で異国の人々と会話



大学前広場（左奥校舎、右奥図書館）

をする機会はほぼないので貴重な経験となりました。

本学の留学生に対しては、大学の研究室（6月に本学来学の先生方による案内）、大学病院の薬剤部、街の薬局の見学の機会を設けていただきました。ドイツと日本の薬学・薬事制度の違いを目の当たりにすることができ、非常に有意義でした。

週末には遠出をすることも可能です。フライブルクは国境に近い場所にあるので少し行けばそこはも



薬事博物館内薬局展示

うフランス、はたまたスイス。国内外問わず魅力的な場所が多くてここには書ききれませんが、薬学関係者に最もおすすめしたいのは「ドイツ薬事博物

館」です。フライブルクから電車で3時間ほどの古城ハイデルベルク城内にあります。欧州薬剤師の歴史、薬や容器の展示、昔の薬局・実験室の復元、薬局看板の変遷等興味深い展示が目白押しでした。錬金術時代からの流れを感じる装置が置かれた実験室に、化学系分野出身の筆者は特に興奮しました。

引率した学生たちも、フライブルク滞在を満喫し、充実した留学生活を送れたようで、それぞれの成長を感じました。今後この経験を大いに活かしてもらいたいですし、少しでも興味を持たれた方は来年ぜひとも参加していただきたいと思います。

■ 研究・産学連携推進室 りょうじ 太田 亮史

例年実施されているフライブルク大学サマープログラムですが、本年より職員も学生同様にフライブルク大学主催の夏大学（語学プログラム）に参加し、学生寮で生活をする制度が設けられ、とても有難いことにその制度の一期生として参加する機会を頂きました。

「ドイツで英語？」という疑問は会う方々にその都度質問をされましたが、自身も参加するまで同様の思いでした。しかし結果として非常に英語力を鍛えられた1ヶ月間となりました。そもそも講師は英語のネイティブスピーカーであり（受講したクラスはイングランド出身講師とカナダ出身講師が担当）、併せて習得目標は「大学入学が許可されるレベルの英語力」と設けられており、授業中はもちろん、寮や街中においても英語漬けの日々でした。（街中のドイツ人は我々より英語が堪能！）何よりその日学んだことは宿題として大量に課題が出され、久しぶりに学生時代に戻ったような日々でした。

滞在中は英語学習もさることながら、フライブルク大学国際交流課との打合せや学生のサポートなど引率としての業務も行いました。学生は午前中の授業は全出席でしっかりドイツ語の習得に取り組んでくれました。また午後については、午後授業に参加

する学生、アクティビティに参加する学生、各自で計画し出掛ける学生と非常にアクティブに過ごしていました。自身が学生時代にヨーロッパを鉄道で旅行した経験から学生達に様々なアドバイスをしてあげることができ、土日には自身で計画し、遠くノイシュバンシュタイン城やゴルナーグラッド（スイス）まで出掛けていった学生を見て感心させられました。

出発日には不安な表情を浮かべていた学生たちも、帰国日には「何とかなる、できる」といった頼もしい一面が行動や発言から感じられるほどで、たくさん事を学んでくれた学生を見て非常に嬉しくなりました。一人でも多くの学生がこのプログラムに参加し、“一生の記憶”を作って欲しいと強く思いました。



クラスメイト達とフライブルク大聖堂を背景に（中央が筆者）

■ 2年次生 井上 絵美子

私は第二外国語で中国語を選択していますが、ドイツ留学を決めました。理由は個の力を持ち、グローバルに活躍できる薬剤師になるためには、外国語の習得に加え海外の医療、またその文化などの見聞を広げる必要があると感じたからです。その点において、第1にアメリカよりもドイツの方が日本の医療制度と共通点が多く、かつ医療先進国なので多くのことを学ぶことができ、第2に1ヶ月近くも留学できるのは2年次生の今しかできないチャンスだと思ったからです。

生活について、午前は授業で午後は自由でした。事前にドイツ語を勉強していったのですが、授業のレベルに追いつけず苦戦しました。大学の薬学部研

究室を見学した際には、有機化学や生化学の授業で習ったところが出てきて、今習っていることが現在進行形で研究対象でもあると感じました。

また、街の薬局や大学病院の薬剤部を見学した際には、日本よりもドイツの方が薬剤師の地位や能力が高いと感じました。それについて調べてみると、ドイツは完全に医薬分業化しており、薬剤師のみに薬局の開設と経営権、調剤権が与えられているということがわかりました。病院では入院患者のみを扱い、外来診療はすべて開業医が行います。そして風邪など軽い症状の場合はまず薬剤師（薬局）に相談しに行き、風邪に効く薬やハーブティーなどを出してもらおうそうです。

他方、薬剤師は住民から求められる知識も多く、見放されないように常に勉強する努力が必要です。



フライブルク大学図書館前にて（筆者は左）

おはら
■ 2年次生 小原 和樹



ハイデルベルクの街並み

授業の中で担任のドイツ人の先生が言われた「ドイツ語の単語や文法の勉強は大切だけれど、世界中どこでもできる。君たちはせっかくドイツに来たのだから、ここでできない勉強をたくさんしてほしい」という言葉が強く印象に残っています。

ドイツでの日々は刺激的で魅力に溢れていました。フライブルクの街は歴史的な建造物に囲まれ、街のシンボルである大聖堂は本当に圧巻でした。自然も豊かで、寮の近くには大きな湖があり、その湖の近くの森には野生のリスが住んでいるなど、どこをとってみても日本ではなかなか目にすることができない景色が広がっていました。ひとたび街に出ると、当たり前のことながら耳にするのはドイツ語ばかりで、初めは慣れない環境に不安を感じることも多々ありましたが、日が経つにつれ、また日々の生活の中でたくさんのドイツの人たちの優しさに触れることで、心の底から居心地の良さを感じるまでに馴染むことができました。最終的にはこのままここで生活していきたいとさえ思うほどでした。

私が暮らした学生寮にはドイツ人4人とイタリア人1人が暮らしており、まったく文化の違う人たちと1ヶ月弱の間寝食をともにしました。もちろん彼らには日本語は通じず、コミュニケーションをとるのもひと苦労でした。片言の英語でなんとかコミュニケーションを取ろうと試行錯誤する毎日で、初めはなかなかうまくいきませんでした。彼らと意思の

これが薬剤師の地位や能力が高い所以であるのと、ドイツの薬剤師が調剤、薬の販売以外にも健康相談を行うオールマイティな存在でもあるところが日本と異なる点だと感じました。

最近、日本でもかかりつけ薬局の制度がスタートしましたが、ドイツのようにオールマイティな存在になることができれば、もっとみんなから求められる理想の薬剤師になることができるのではないかと思います。

疎通ができるようになってきたときは心の底から嬉しかったのを覚えています。

ドイツに滞在中は他国の人と交流する機会が多くありました。中でも印象に残っているのは、ヨーロッパ・中東・アジアなど老若男女を問わず世界中の留学生とチームを組んでサッカーをする大学主催のサッカーイベントです。初めはまったく話したこともない見ず知らずの外国人ばかりで少し戸惑い気味でしたが、いざ試合が始まるとチーム内で自然とコミュニケーションが増え、本当に良い雰囲気でも楽しかったのを覚えています。そして何よりも、スポーツを通じて国籍や話す言葉も違う人々との言葉以上のコミュニケーションがとれ、本当に良い経験ができたと思います。



サッカーで異文化交流（▲：筆者）

冒頭でドイツ人の先生の言葉にふれましたが、彼の言葉こそ、この留学の目的であり、私のこの留学へ対する考えのすべてだと思います。日本だけでなくいろいろな世界を自分の目でみることの大切さ、慣れない環境で生活していくことの大変さ、異文化の人々とコミュニケーションをとることの難しさ、そしてそれらの困難を乗り越えた時の喜びや達成感など、本当に多くを学びました。そして、この貴重な経験をここだけにとどめることなく、これからの成長のために活かしていきたいと思っています。

■ 2年次生 杉森 菜々子

フライブルク大学のサマープログラムに参加し、とても充実した1ヶ月を過ごすことが出来ました。平日の午前中は、20人ほどの少人数クラスでドイツ語の授業を受けました。私のクラスでは、他大学の日本人学生もいましたが、アメリカ、イギリス、イタ

リア、タンザニアなど色々な国からの留学生が集まっていました。授業はほとんどがドイツ語で、分からないときは先生が英語に訳して説明するといった形でした。ドイツ語のみで書かれた教科書を用いて自己紹介、道案内、ホテルや病院で使う会話表現など、実際に役立つ内容を学びました。日本人以外の留学生とペアになり、ドイツ語を話す練習や単語



ゲームもしました。最初の頃は何を言っているのかもなかなか理解できず授業についていくので精一杯なうえに、他国の留学生が授業を止めて質問をする積極性に圧倒され、自分から発言することが出来ませんでした。

ドイツ人のトーマス先生と
しかし宿題や予習復習を続けるうちに、徐々に授業内容を理解し、発言もできるようになりました。

もちろん勉強だけではなく、休日には少し遠出をして、ミュンヘンなどの大都市や隣の国のフランス、スイスを観光しました。自分たちで行き先、交通手段、時間を調べて計画する等、日本から遠く離れた異国の地で行動できたことは、少し自信になりました。

また、薬局、病院、薬学部、薬事博物館を見学し、ドイツの薬学事情について様々な話を聞くことができました。その中でも訪れた大学病院で、薬剤師は直接患者のもとに行って説明せず、医師が患者に対して薬の説明するというのを伺い、驚きまし

た。薬局では薬剤師のほかに、薬学技術アシスタント、薬学商業従業員が働いていて、それぞれの仕事の内容は異なります。早くから医薬分業に取り組んでいたドイツで、日本とはまた違う薬学事情を学びました。

ドイツ語は第二外国語として1年と少し、英語は小学生の頃から10年以上も習っているにも関わらず、全然上手く話せないという現実には悔しい思いをしました。今後は、この悔しさをばねに、ドイツ語と英語を今まで以上にしっかりと勉強したいと思います。とても良い刺激を受けた夏休みでした。



街中の薬局